

総合科学技術・イノベーション会議有識者議員懇談会 [公開議題]

議事概要

- 日 時 令和3年10月21日(木) 10:02～10:53
- 場 所 中央合同庁舎第8号館 6階623会議室
- 出席者 上山議員、梶原議員(W e b)、小谷議員(W e b)、  
橋本議員(W e b)、藤井議員(W e b)、梶田議員(W e b)  
(事務局)  
松尾事務局長、米田統括官、井上事務局長補、覺道審議官、合田審議官、  
阿蘇審議官、高原審議官、橋爪参事官、生田参事官  
(内閣府地方創生推進事務局)  
中野参事官  
(文部科学省科学技術・学術政策局産業連携・地域振興課)  
井上課長
- 議題 地域の中核となる大学振興パッケージについて

○ 議事概要

午前10時02分 開会

○上山議員 皆様、おはようございます。少し定刻を過ぎましたが、皆さんおそろいになりましたので、これから総合科学技術・イノベーション会議有識者懇談会を始めさせていただきます。

地域の中核となる大学振興パッケージについて、と題しまして、議論をしていただきたいと思っております。

本日は8月26日にC S T I本会議において、大学改革の方向性と題しまして、世界に伍する研究大学について議論させていただくと同時に、青森県の三村知事にも御参画いただき議論を行いました。その際にテーマとなりました地域の中核となる大学振興パッケージについて50分ほど時間を頂いて議論させていただきたいと考えております。

本日の会合では内閣府科学技術・イノベーション推進事務局及び文科省よりパッケージの検討状況について報告いただいた上で、今後の検討事項等について議員の皆様からの御意見を頂

戴したいと考えております。

本日は文科省から科学技術・学術政策局産業連携・地域振興課の井上睦子課長、内閣府の地方創生推進事務局から中野理美参事官にもお越しいただいております。

まず、最初は事務方の生田参事官から資料1の説明をお願いします。

○生田参事官 資料1に基づきまして、パッケージのまず全体の話をし現状も含めて紹介させていただきたいと思っております。

まず、1枚目おめくりいただきますと、こちらパッケージの議論に入る前に、研究大学に対する支援の全体像、個人支援は除いておりますが、組織に対する支援の全体像を、少し模式化した図として提示させていただいております。

当然、この対象は国公私全体を想定しております、カテゴライズとして四つに便宜的に分けておりますが、これは必ずしも大学をこう分けるということではなくて、大学が持っている機能ごとにその支援の在り方を考えていく一つの頭の整理として作らせていただいたものです。

一番上のところ、世界と伍する研究大学、ここはいわゆる大学の組織全体として世界と伍して競争していくような研究大学を想定しております、そこに対しては現在専門調査会で議論が行われている大学ファンドによる支援を想定しております。

そうではなく、大学の中にある意味一つ、例えばすごく特出する世界、トップレベルの研究シーズを持った拠点があるですとか、若しくは真ん中の段にいきまして、大型の産学連携を行っているような共創の場、そういった機能を持っているですとか、若しくは一番下のブルーのところにおいていただきまして、地域の社会において大学のポテンシャルを活用しながらその地域活性化を目指していく、そういった機能を持っている。様々な大学、多様性を持って動いていると思うのですが、そういったところに真ん中辺りで、オレンジ、それぞれ色を対応させておりますが、世界トップレベルの研究拠点に対する支援策の部分ですとか、共創の場、こういった機能に対する支援策、そして地方創生のハブ、そういった機能に対する支援策を絵で表させていただいております。

今回、御議論いただくパッケージというものが名前に地域と書いてあるので、狭く感じられるかもしれませんが、このブルーの枠で囲ってある全体のことを我々このパッケージでは考えていきたいと思っております。

特に、この上の方は文部科学省を中心にしたいわゆる基礎研究の部分というのが重点化していくと思うのですが、真ん中から下になるにつれて、ある意味政府全体で出口官庁も含めて一体的にこのパッケージを検討しなければならない。そういった観点から内閣府を中心として各

省が連携しながらこのパッケージというものを策定していくといったことを考えてございます。

続いて、2ページ目にさせていただきますと、こちらは去る8月26日のCSTI本会議の資料、再掲させていただいております。

こちらは現状の認識をこのように整理させていただきまして、左側、幾つか図を並べておりますが、いわゆる若者にとって地域の大学に魅力がない、どうしても多くの地方、地域では人材が流出してしまうといった課題ですとか、若しくは大学発ベンチャーの数を比べても、大学から新しい社会的価値、産業、そういったものを生み出す、そこまでまだなかなか貢献ができていないのではないかと。

それから、今度一方で霞が関側の課題としまして、右の模式図で書いてございますように、いわゆる各省がそれぞれの政策目的ごとにいろいろな施策を展開している現状でして、これがどうしても現場目線から見たときの統一感がなく、その連携というものも限られている。こういったことをこれからどのように変えていくことが必要なのか。そのようなことを現在検討しているところです。

続きまして、3ページ目、そういった課題認識から冒頭申し上げましたように、各府省が一体となって連携するための事務的な体制を整えさせていただいております。地域の中核となる大学振興タスクフォース、9月15日に第1回を開催しております。メンバーといたしましては内閣府CSTIを中心とし、地方創生部局、それからこれからSociety 5.0の社会に向けてという意味もありまして、デジタル庁にも入っていただいております。また、地方自治体の巻き込みという観点から総務省、そして右側にいきまして、文部科学省、そして出口官庁という意味で農林水産省、経済産業省、国土交通省にも御参画いただいております。

中段から下、その検討に当たってのスケジュールを簡単に示しておりますが、こちらのタスクフォースで夏から年度末に向けて検討してまいりますが、途中、本日、木曜会合にこのように出させていただくと同時に、また来月も是非木曜会合で御議論いただきたいと思っております。

そして、最終的なものは、年度末、12月ないし1月ぐらいを考えておりますが、CSTI本会議にここは先ほど、冒頭全体像の中で申し上げました大学ファンド、あちらの専門調査会の最終まとめと並行する形で出していきたいと考えている次第でございます。

続いて、4ページ目にまいります。

このパッケージを検討するに当たりまして、やはり霞が関目線ではなくて、地元の現場目線で考えるべきではないかという問題意識に立ちまして、少し時間も限られている中ではござい

ますが、関係者へのヒアリング、関係者というのはいわゆるアカデミアだけではなくて産業界、そして自治体の関係者の方々にヒアリングをしてまいりました。そこで浮かび上がった課題を幾つか紹介させていただきます。

左側、まず上からでございますが、やはり何といても大学の中で社会貢献をしている人材に対する評価がなかなか高くない。インセンティブが少ないといった状況。それとやはり目に見える成果を出さない限り、評価されないということで、次に続く人材が育ちにくいといった課題。真ん中辺りにいきますと、つなぐ、大学と地域をつなぐといった観点からはやはり事業化、大学のシーズを使って事業化しようとしたときにもその優秀な専門人材、そういった方々を大学に呼び込む、こういったことに苦戦しているといった状況。

それから、大学及び自治体、それぞれの接続点、窓口が不明瞭であるといった課題。そして、下の方にいきますと、地域といった名前もあれなのですが、大学というのは県内、域内に閉じずに自分たちの持っている成果をグローバルに展開する。そういったことを想定しているのに対して、やはり自治体さんは域内の住民の利益最大化、こういったことを目指すのが当然でございますので、その辺りのミスマッチというのが生じる、これも課題として浮かび上がってきております。

また、右側にいきますと、そもそも地域のニーズといったところが実際つかめていないのではないかと。要するに大学のシーズプッシュにとどまってしまっていて、やはりその場合、最後まで社会実装に届かない、社会実装というか本当にインストールするところまで結実しないといった課題、それからニーズをみんなで探そうということでよく会議とか産学官の連携、協議会のようなものが数多くプロジェクトごとに作られますが、それがほとんど形式的になってしまっている、そのような課題。

そして、ひるがえって国の施策側に対するかなり厳しい御批判もありましたが、やはり先ほど課題認識のところでも申し上げましたように、国の施策があまりにも複雑でばらばら、分かりにくいといったもの。

それから、国の実証事業、よく5年ものとか多いですが、いいところまでいっても最後まで届かない。若しくは次の施策につながらない、そういった課題。そして、昨今、特区というものでいわゆる研究開発の成果を実装しようという形はありますけれども、それを活用しようとしてもなかなかリテラシー、法規制に関するリテラシーとか、あと実際にそれを申請しようとしたときのハードルがかなり高いといったことでメリットが見えにくい。そのような意見を頂戴しているところでございます。

なお、本日御欠席ではございますが、佐藤議員にも事前にこのパッケージの考え方をお話ししたときに頂戴した意見を少し紹介させていただきますと、一つはまずグローバルに大学の成果、展開を目指すといった観点。それと地域の活性化を目指すといった観点。この二つはやはり切り分けてそれぞれの支援の在り方を考えることが必要ではないかといった点。

それから、もう一つは先ほどニーズのところがございましたが、地域の課題が何かといったものを明確に定めることがまずもって重要で、その課題ごとのロールモデルを地域に幾つか作って、特区なども活用しながらそれを育てていく。そういったことが必要ではないか。そのような御意見を事前に頂戴しております。

続いて、5ページ目、そういった課題認識を踏まえ、現在検討中のパッケージの骨格をこちらにお示しさせていただいております。

構造としては三つに分けてございまして、一つ目、これは大学の強みや特色を伸ばす取組。ここの部分はどちらかというと、次に文科省から紹介していただく内容になるのですが、事業間の連携ですとか、大学改革と連動した研究環境を改善。それから、やはり特定のピークを持った大学に対する支援の強化等々がここに含まれております。

二つ目の観点、これはつなぐといったところがキーワードになりますが、先ほど申し上げました事業ごとに作られている産学官のネットワーク、協議会、そういったものを一度可視化して情報の共有化をしてはどうかと。これは霞が関側にとっても必要ですし、地域の現場側にとっても同じ地域でこういったことがなされている。それを知るだけでも一つ大きな第一歩ではないかと思っております。

その上で、そういったものが見えてくると、そこに存在しているキーパーソンが浮かび上がり、その人たちが今度地域内のみならず、地域を横断してつながっていく、そういったところまでを念頭に置いております。

また、つなぐという意味では同じC S T Iの中ではスマートシティとかスタートアップエコシステム拠点都市、そういった座組がございますので、こういった中における大学の活用といったものもしっかり進めてまいりたいと思っております。

また、やはり何といってもつなぐといったときに、最後は人でございますが、そのつなぐ人材に着目した仕掛け、何かしら国からそこにスポットライトを当てることでそういった人たちのインセンティブを高め、また外からの評価を高めていく。そういったことが重要ではないかと考えてございます。

最後の三つ目の柱、こちらはそのように機能を強化、つなぐ仕組みを構築した上で実際に大

学を地域で使い倒そうというようなものでございます。ここで幾つか考えられることとして、各府省が今ばらばらに様々な施策を展開しているものを是非とも一体的に支援ができないだろうか。その第一歩として現在考えているのは政策課題ですとか地域の課題ごとに各府省が持っている事業、これをマップとして整理して、社会変革までの道のりをまず可視化してはどうかと。

そうしますと地域側が自分たちがここまでのフェーズ、その次にどこに展開しようといったときにも分かりやすいですし、あと我々霞が関サイド側も良い取組、ポテンシャルの高い取組があったらそれを情報共有しつつ伴走支援する、そういったこともできるのではないかと考えております。

また、大学への先ほど特区の活用のハードルが高いというのもございましたが、これは大学の特例措置みたいなものが設けられないかということも考えてございます。

そして、何といたってもやはり意識改革、これは大学側及び自治体側両方だと思いますが、大学側が文科省からお金をもらった形で産学連携するというのはある意味当然かもしれないですが、そうではなく出口側、地域側からのお金を受け入れて、地域貢献をする、これは正に地域側も本気でございますので、そういったことをやっている大学に対してインセンティブを与えるですとか、あと自治体の意識改革、ここでやっぱり重要になってくるのは地公体が設置している管理している公立大の活用を含めてだと思っておりますが、正に自治体を巻き込む仕掛け、ここは総務省さんとも御協力いただきながら考えていきたいと思っております。

以上、このような骨格を持ったパッケージをこれから更にタスクフォースの場を通じて検討を深めてまいりたいと思っております。

説明は以上です。

○上山議員 ありがとうございます。

続きまして、文科省の井上課長より資料2の説明をお願いします。

○井上課長 資料2に基づきまして、文科省におけます検討状況を御説明申し上げます。

1 ページ、おめくりいただきまして、今、生田参事官の方から御説明のありましたこの赤い枠の部分の特に①、そして③のところを検討が少し進んできておりますので状況を御報告申し上げます。

①につきましては令和4年度の概算要求プラスあと省の中で、内部で局、課を越えてやはり施策を連携して担当者も連携して、共に大学の目線で伴走支援していくことが必要であろうということで、省内の連携方策というものについても検討を進めているところでございます。

次のページ、おめくりください。

こちらの図は文科省の内外の関連施策、これを連携して大学が強みや特色を伸ばして、戦略的に経営していってもらおうと。これを我々が伴走支援しようという構図の全体を示したものでございます。

下から御覧いただければと思いますが、茶色いところ地面のような絵にしておりますが、地域の中核となる大学、強みや特色を伸ばして戦略的に今後経営をしていきたいと思いますというのが大きな考え方となっております。

こちらの図、一番下の茶色いところ、国立大学の場合で説明を申し上げておりますが、横にございますように私立大学についても施策の連携をとということで省内で議論しているところです。

国立大学を例に、この例を御紹介いたしますと、御案内のとおり、来年度から国立大学法人第4期が始まるということです。第4期の考え方の中で各大学の持っているミッションを十分に踏まえて、そして強みや特色を發揮していこうということが大きなコンセプトとなっております。

こういった考え方で運営費交付金ですとか、また補助事業である経営改革促進事業等もその資金の配分等について具体の検討がなされております。

我々の反省としましては、これまで国立大学法人全体を見ている担当課とあとその左斜め上②のところ御覧いただきますと、例えばWP I ですとか共創の場といった個々の強みを伸ばすような事業を持っている補助金の担当課とが、今はばらばらに動いていたという反省がございます。

そこでこれを機にそのミッションを踏まえて強み、特色を伸ばすという共通の方針の下に、この文科省の多々ある事業の中でも特にこの強みや特色を伸ばす事業というものを整理、こういったものというのを挙げて整理しようと考えておまして、そういった事業について基盤的経費の配分やその大学の強みや特色を伸ばす事業での取組状況と担当課同士が連携して情報も共有しながら大学を支援したいと、そういうことでございます。

そして、今、申し上げた連携体制というのが右側の③のところでございますが、その上の④でございます。特に社会実装を指向する取組を特徴や強みとしている大学につきましては、生田参事官の方の御説明からもありましたように、各重要政策課題や地方創生を担当する府省間の事業との連携というものを十分見据えていく必要があると。

つまり文科省の中の事業である程度研究開発を進めていったとしても、本当に実装していく

というところまでが途切れてしまう、あと分かりにくいといったような話もございましたので、ここをしっかりと各府省連携して伴走支援をしていく。こういう仕組みを作りたいと考えております。

次のページ、3ページをおめくりいただきまして、全体の①のところの大学の強みを伸ばすということで、実際に対応している令和4年度概算要求につきまして概略を説明したものです。

まず、強みを伸ばすということで、社会実装、人材育成、研究という大学の営みの大きな3要素でございまして、特に令和4年度の概算要求においては社会実装の部分の充実ということを中心にして要求させていただいております。

1点目の共創の場の支援というのが、こちらの方がいわゆるシーズプッシュではなくて、地域、また社会の課題というものが何かということをあらかじめ産学官の関係者で十分協議をして、そこからバックキャストして必要な研究要素、人、そして資金というのを集めて、産学官連携して取り組むというタイプの拠点形成の支援のものです。

特に、地域に着目した点としましては、地域共創という分野を中に設けまして、正にその地域の課題というものをしっかりと特定してやるという建て付けの事業でございます。

その下にございますのが大学発新産業創出プログラムということで、いわゆるスタートアップ支援でございます。こちらもスタートアップエコシステムの拠点都市というのが内閣府、文部科学省、経済産業省連携して選定されている状況でございまして、その枠組みを意識しながらそこに入っている大学が連携して取り組むスタートアップ支援というものを強化していきたいということでございます。

3ポツ目ですが、大学の教育プログラムを作るに当たっても産学官、そしてその地域の大学間の連携といったものを通じてこれまで大学が提供してこなかったようなプログラムを支援したいということで、人材育成部分、新規となっております。

ほかに研究の部分もいろいろ事業がございまして、こちらの事業についてどう中核大学に支援していくかということは単発で終わるものではなく、今後継続的に検討していくものだと考えておりますが、令和4年度については特に今申し上げた3点のところの拡充というのを中心に据えているという状況でございます。

続きまして、4ページを御覧ください。

こちらでは府省間の事業連携の例といたしまして、内閣府の地方創生の御担当の方で実施していらっしゃる地方大学・地域産業創生交付金事業というものの連携について具体的に検討を進めている状況の御説明です。



このグラフというか、図でもございますように、文科省の産学連携の事業では大学主導、あとはイノベーションというところがその重きになるわけですが、それが本当に実装していくということになると、その場である自治体、そして具体の産業、そして雇用といったところに軸が移っていくということになります。

ここのトランジションの部分というのはなかなかスムーズにずっと行くものでもないわけでありまして、これまでそれぞれで事業を行っていたわけでありまして、左の吹き出しにございますように、②のところからで恐縮ですけれども、既に案件形成を共同で支援していこうということ。担当者同士で併任を掛け合っておりまして、一緒にその大学の取組や悩み、自治体とも話をするというのも3者一緒にやるということ。

また、事業説明会も合同でやっていこうといったこと、文科省のプロジェクトを始めたときから初めから連携して、一緒に伴走支援していこうということで、既に実務的にも動いているところではあります。

その下のところですが、このほか、C S T I 事務局の方とも協力していただいて、イノベーションの主な重要政策課題、例えば地域の脱炭素、資源循環、ヘルスケア、自動運転というか M a s S とか、スマート農業等々、こういった社会的な課題、地域が抱える課題、そして先端技術やイノベーションが必要なもので、大学が取り組んでいるものといったものが見えてきておりますので、各府省のターゲットとしているような関連技術の高度化ですとか基盤技術の開発、また実際に実装していく事業といったようなものを可視化してマッピングして大学がどういう道筋でその実装まで取り組めるのかということですか、それぞれの事業の担当者が可視化されることによって情報共有したり、伴走支援したりといったことを進めてまいりたいと思います。

最後に、5 ページです。

研究力の部分です。2. のところの一番下を御覧いただければと思います。下から4行目ぐらいからですが、現在、大学等の研究振興に関して総合的に検討していかなくてはいけないということで、世界と伍するだけではなく本当に日本の研究力全体をどうアップしていくかというようなことを議論するために、10月半ばに文科省にあります科学技術・学術審議会の下にこの大学研究力強化委員会というものを立ち上げて議論を始めようとしているところです。

こういった委員会の場も通じて、継続的に地域の中核大学の研究力といったものをどう高めていくかということや議論を深めながら施策を具体化していくということに取り組んでまいりたいと思います。

以上です。

○上山議員 ありがとうございます。

それでは、以上の報告を基に議員の先生方からの御意見を頂きたいと思います。どなたでも結構ですが、お手をお挙げください。よろしいでしょうか。

今、藤井議員が挙がりました。藤井議員、どうぞ。

○藤井議員 御説明ありがとうございました。

全体の御説明を伺っていて、2点あります。一つは大学へのニーズ、期待です。地域社会における大学への期待、地域ニーズというものをここまでやってきている施策で本当にきちんと吸い上げられているのかが気になります。

地域の課題解決に資するというのは大事なポイントですが、地域に大学が存在することによる、例えば、知的、文化的なリソースということもあると思いますし、それから人材育成WGでも議論になりますが、例えばSTEAM教育に代表されるような機能も含めて地域ニーズをどうやってきちんととらえるかということは非常に重要なポイントだろうと思います。タスクフォースが動いているということですので、関連する好事例を掘り起こすなども含めて見ておく必要があるのかと思います。

もう1点は、地域の中核となる大学の側のつなぎ手の議論がありましたが、大学の側の体制づくりと併せてやらないとうまく進まないのではないかという点がございます。例えば研究者ベースのつながりでいろいろな活動を展開することも考えられると思うのですが、その場合はいろいろな形、ばらばらな形になってしまいます。したがって、やるとすれば大学、組織全体として地域ニーズを掘り起こして、全体を動かしていくということになりますが、同時に大学の側の体制をしっかり作っておく必要があるので、そういう意味での背中を押すというやり方を考えていく必要があるだろうと思います。

私からは以上です。

○上山議員 ありがとうございます。

地域のニーズとか教育人材ワーキングとの連動含め、生田参事官、何かありますか。

○生田参事官 藤井議員、ありがとうございます。

正に本当に大学に対する期待というのは個別の研究ポテンシャルとか、そういうことだけではなくて、おっしゃったように大学が存在するその価値、そのものに対するものというものをきちんと認識をした上でないと、多分使い倒すという言い方はおかしいですが、多分できないというのは本当におっしゃるとおりだと思いますので、その辺りを正に今回、出口官庁、それ

からこれからの時代、DXというのが肝になってくると思いますので、そういったところの役所にも入っていただいたタスクフォースにてしっかり検討してまいりたいというふうに思っております。

つなぎ手の問題、本当にそれもおっしゃるとおりでございます、今、結構孤独というか個人ベースで結構そういう草の根の活動をしてくださっている方とか、そういう方でもっているようなところもありますので、やはり大学の組織としてどう位置付けていくのか、それは多分大学改革との連動というのも出てくると思いますし、その辺のところは我々も認識をした上で政策の展開というのを進めてまいりたいと思っております。

○上山議員 その次は橋本議員、どうぞ。

○橋本議員 今日の御説明の中で、内閣府の説明の1ページ目とそれから文科省の説明の最後のページに明確に書かれているのですが、私が申し上げたいのは今日の御説明を大学側の方から聞くと大学のファンクションを地方への貢献というのをメインにど真ん中に置いていくのだなと聞こえてしまう。そうではないということを明確にする必要があると思います。

今、申し上げたように、内閣府の1ページ目と文科省の最後のページ、明確に書かれているわけですが、内閣府の1ページ目ですと、四角の部分の一番上の方に特定分野で第一線の研究者が世界から糾合する優れた、要するに世界と戦う優れた研究者たちのあるいはその分野をしっかりサポートしていくのだということと、それから文科省の最後のページに書かれているように、大学等における科学技術に関する研究大学全体を議論して、その中でこの議論なんだということを明確にする必要があると思います。

すなわちそれはどういうことかと言うと、なぜこういうことを今やっているかと言うと、今回大学ファンドで非常に大きなお金が大学という、大学の研究現場に大きなお金が入るわけです、非常に大きなお金が、今までなかった。そうすると今行われているいろいろな事業が、そういう大きなお金が入ってくることによってもう一回再編成する、そういう位置付け、そういう機会だからこれをやっているのだと。

ですので、例えば説明の中で一部出てきましたが、例えばWPIの予算は今までなかったものですから、そうするとあまり明確に言い過ぎてしまうとまた危険なのですが、内閣府の1ページ目の絵ですと、今の地域の中核となる大学振興パッケージによる支援の方に入るわけです。予算、お金で見ると。

だからといって、上の方にいくのかいかないのかという話はまた別として、なので今議論していることは大きなお金が、大学の方に国費が入ってくるから、だから全体のアロケーション

を見て、それでこの研究大学という、世界と伍する研究大学以外のところにもしっかりとサポートするためのことをやっているんだ。その一つが研究、世界と戦っていく研究の、この下の方、世界と戦っている研究をしっかりと、そういう人たちを応援する。

もう一つ、地域のためにというか、地域と一緒に、地域課題をしっかりとやっていく。この二本立てで応援していくのだということを明確に示さないと、これは多分大学の方、今日、聞いていると思いますが、上の方に入らなかったら地域のことをメインにやって、一部少し研究、一部の人だけがいわゆる最先端の研究をやるのか、そういう閉めになってしまうのかと誤解を持つと思います。

少なくとも私の理解は今申し上げたようにそうではなくて、結局予算と裏打ちされたアロケーションの話なんだと思うんですね。その中で日本全体の研究力を上げ、日本全体の研究力、国際的な研究力を上げるとともに、地域の活性化に大学がしっかりとコントリビューションしていく、そういうアロケーションはどうあるべきかという議論のために今ここで整理学をしているのだという認識ですので、多分文科省、内閣府も同じだと思いますので、その辺りは明確にしておいた方がよろしいのではないかと思います。

以上です。

○上山議員 今の御質問は、今までずっとそういう論点で大学ファンドと連動させて地域支援パッケージ、そもそも総合支援パッケージという言葉を使っていますので、むしろセカンドティア、サードティアの研究大学の重要性ということを強調してきているわけです。今後全体の資金がどういうマッピングになっているのかということを中心に分析をしていきますよという話を生田さんの方からもしていただきましたので、それを手にどのような資金のアロケーションがあるかということを中心に先生方に議論していただきたいと考えております。

○橋本議員 だから、全く思いは同じなんです。

○上山議員 同じですね。

○橋本議員 それと同時に、今、裏目に出ているのは実は全体のことを言っているのですが、タイトルが地域の中核となるようになったので、これは官邸でやった会議のときにこういうタイトルで、地域の中核大学振興パッケージという名前を使いましたからね、だからそこに押しやられているようなイメージが与えられてしまうのですね。ですので、繰り返し、今、上山議員、私が言ったことは言っていないと、常に強調していかないといけないと思って言っているわけです。

○上山議員 ありがとうございます。

これは恐らく地域の問題に関して、自治体の資金ということも関わってくるので、いわゆる文科省の予算だけではないところということがターゲットになっていく、そこはなかなか動きにくいのでこういうことを掲げていますが、繰り返しになるようですが総合支援パッケージということを考えているということで御理解いただければいいと思います。

その次は、梶田議員、どうぞ。

○梶田議員 御説明、どうもありがとうございました。

実は橋本議員の御指摘とほぼ同じ印象を私も持ちまして、非常に心配いたしました。特に資料2の文科省の1ページ目の赤い囲みの部分で、これを読むと地域の中核大学に求められているものが、地域の産業振興にかなりウエートが置かれているようにどうしても読んでしまいます。

最後の御説明をお聞きしまして、5ページ目ですか、大学研究力強化委員会、これは地域の中核大学も含めてだということを知って少し安心したのですが、やはり印象としては今日の資料からは、地域の大学の役割が研究などから大きく変わってしまうのではないかと見てしまうので、そうじゃないということを常に明確にしていいただければと思います。

そのうえで、1点、例えば地域の将来の発展ということを考えてときに、様々なシーズを地域が持っているということが必要だと思います。こう考えると本当に地域は多様性という魅力もある。その際に大学の期待されるものの一つは、このような多様な地方の良さを幅広く継承、発展させていくという役割もあるのではないかと思います。このような役割をサポートしていくことも重要だと思いますし、そしてこのような役割というのはすぐに結果が見えるようなものではないので、恐らく長年にわたる取組が不可欠なのではないかと思います。

以上です。

○上山議員 ありがとうございます。

セカンドティア、サードティアの研究のことは実はこれまでずっと強調してきて、逆に地域の方を忘れていたのではないかと、そういう声もあって、今回はここにフォーカスを置いています。もともとは大学ファンドで資金が行かないかもしれないけれども、とても重要な研究を行っているような中核大学への支援ということがもともと根底としてあって、それに加えての話だと御理解いただければいいと思います。

次は、小谷議員、どうぞ。

○小谷議員 私も橋本議員、梶田議員と全く同じでございまして、最初のページを開いてみますと、世界に伍する研究大学というものが大学ファンドで支援される。それ以外は地域の中核

大学として地域に貢献すると、そう見えなくはない。左の端を見ると一定分野で世界トップレベルの研究拠点を形成とか、大学のもつ多様な役割が書かかれているので、そうではないということが分かりますし、また御説明をお聞きすると、我々が思っていることと差はないということが分かります。が、なかなか皆さん資料をしっかりと御覧になる時間がないということもあり、言葉が一人歩きする可能性がありますので、そこは本当に丁寧にやっていただければと思います。

国立大学が法人化した後、大学ごとにシステム改革が推進されてよかったのですが、一方で、例えば研究者コミュニティの横のつながりとか、大学を超えた人材のエコシステムが分断しつつあるという危惧も持っています。地域と括ってしまうことで、それが更に分断されていかないかということに非常に心配しています。

世界に伍する研究大学が日本全体の研究力、若しくは国全体の価値を高めることにつながっていくためには全体としてのエコシステムが築かれるということは非常に重要であり、文科省の中にそういうことを考える委員会ができたということは素晴らしいです。

繰り返しますが、世界に伍する研究大学を幾つか作り、地方の中核になる大学を幾つか作るということではなくて、全体でのグランドデザインの下に、研究者コミュニティの連携や大学間の連携というものを強め、全体がバージョンアップしていけるような制度設計にさせていただきたく存じます。

以上です。

○上山議員 ありがとうございます。

グランドデザインのことは以前からここでも議論させていただいていますし、文科省の方では研究力強化室ができたということで、井上課長から何かありますか。

○井上課長 ありがとうございます。正に先生たちの御指摘、もうおっしゃるとおり、我々もそういった誤解がないかということに危惧して、本当は強化委員会が立ち上がってればその具体のということでもう少し御安心いただけたかと思うのですが、すみません。しっかりそういった形で本当に日本の研究力全体ということが極めて重要ですので、その部分しっかり議論させていただきながら政策も具体に進めたいと思います。

○上山議員 見せ方がとても重要だという御指摘は本当にそのとおりだと思いますので、今後少し気を付けますが、これは僅か数枚で全てを書き切ることはできないので、グランドデザインとなると、かなり綿密な設計図を書かないといけないということになると思います。それを半年ぐらい掛けてということだと御理解いただければと思います。

次は、梶原議員、どうぞ。

○梶原議員 大学の先生方からのコメントをお聞きし、産業界の視点とは若干違うところもあると思いました。地域か地方かという表現の問題については、地方よりも地域の方が広がりがある印象を持っています。従来、施策が個々ばらばらで、どう使うかということも個々の対応しかしていなかったところを、パッケージとして分かりやすく見せていくということは非常に必要なことだと思います。また、それを受け手の大学側がきちんと理解できるということが重要です。説明の仕方や、うまく使えるためにつなぐ仕組みという表現がありましたが、一方で、大学の方にも体制の構築が必要だと思いますので、一方的な支援の仕組みではなく、現場側からの主体的な改革、現場主導の改革を応援していくような、双方向の視点が常に入るような取組に変わっていただきたいと思います。

ヒアリングの結果の中で、個人の研究者の評価軸が必ずしも地域への貢献に置かれておらず、なかなかモチベーションが上がらないという指摘がありました。これは常に言われていることだと思います。評価の考え方はそれぞれの大学で変えていくことかもしれませんが、評価軸や視点を変えさせるような新しい取組が重要だと思います。

産業界としては、各地域がそれぞれの大学の良さをうまく使って発展することが重要と考えますし、岸田政権でも地方からデジタル化をする、地方のデジタル化が重要だというようなことが言われていますので、地方からの課題解決、イノベーションの社会実装、人材育成という全ての面において、やはり地域に存在している中核大学を全体としてうまく底上げしていくことを期待します。

○上山議員 ありがとうございます。

事務局の方は苦勞してヒアリングをしていただいて、今のようなことも聞き取っていると思いますが、何か補足はありますか。

○生田参事官 正に本当に、今回ヒアリングさせていただいて、大学側の窮状、それから逆に言うと大学のみならず地域といったときに産業界、それから自治体もそうです。自治体の方のヒアリングも結構面白かった、大学と常時付き合いがなかなかないという部分から、何かやろうとしても地元の中小企業にどうしても頼ってしまっていて、特に国立大学となるとハードルが高いですとか、そういういろいろな本当の現場目線での課題というのも多いというのが今回感じたところでした。

いずれにしても国としていろいろな施策を打つに当たって、押し付けて枠にはめてこうなさいということではなくて、新しいやり方を作っていく、一緒にその大学と正に自治体、それ

と国とがそれぞれのやるべきことを考えながら新しい方法を模索していくというような、そういった形でこのパッケージの中身というのを膨らましていきたいと思っております。

○上山議員 ほかの議員方々の御意見、よろしいでしょうか。お手はもう挙がっていないように見えますが。

今日は良い御意見を頂きました。やはり見せ方の問題が一つ大きいということと、セカンドティア、サードティアの研究力の問題、それから研究者のコミュニティの連続性の問題、大学ファンドと違って、これはまだ資金が明確にまだ見えてないというか、まずそこがクリアするのにまだ少し時間が掛かると。

これは文科省だけではなくて、自治体のお金も含めてなのですが、そこがないと、その資金をセカンドティアを含めてどこまでどういう形で振り分けていくのかという議論にまだ入れないということです。その作業を今やっていると御理解いただければと思います。それが出てくると、今、御懸念があったようなことがもう少し御理解いただけると。ただ何度もここで強調していくべきだという御意見はそのとおりだと思いますので、承りたいと思います。

それでは、地域の中核となるという言葉が今日はちょっと引っかかりましたが、総合的な大学支援パッケージと御理解いただいて、このセクションを終わりたいと思います。

どうもありがとうございました。

午前10時53分 閉会